

環境学研究科で知った
学際的研究の面白さ

都市環境学専攻 博士後期課程 2年
Marjan Khaleghiさん

イランからの留学生、Marjanさんの研究テーマは、主に中高生の子どもの交通行動。このテーマを選んだきっかけは、SDGsのターゲット11.2や国連の子どもの権利条約を知ったからだと言います。生活の中でさまざまな交通手段を利用して行動する子どもたち。それが生活の質(QOL)にどんな影響を与えるのか、日本の農村部において調査したいと考えています。調査方法としては、フォーカス・グループ・ディスカッション、アンケート調査、旅行日誌による交通パターンの収集などを用いています。

もともと日本への留学に強いイメージはなかったと言うMarjanさん。けれどもこの学際的な研究を掘り下げるための指導教官を探していたところ、出会ったのが加藤博和先生。

「受け入れてもらってラッキーでした。来日して環境学研究科のことを知り、ほかの学際的・横断的な研究にも携わることができました」。この2年間でさまざまな分野の知識を深め、多くのことを学び、研究とともに自分自身も成長したとMarjanさん。それこそが研究の醍醐味だと言います。

Marjanさんの日常に溶け込む研究室、自転車で出かける鶴舞公園、住んでいる町の何気ない風景、充実した留学生生活を満喫する一方、将来については「人生は一度きり。研究は続けますが、将来はどこに行くか…。居心地のいい場所から抜け出して未知の場所、未知の出会いを求めていきたい」。でも今は、研究室での仲間との議論や、その後も夜中まで続いたおしゃべりの時間が再び訪れることを願っています。



初めての京都、嵐山へ

コロナウイルス感染が
拡大する前に訪れた奈良名古屋大学での着物ワーク
ショップ。「上品な振袖が
似合っていたと思います!」

編集後記

環境学研究科は、留学してきた学生自身が「こんなに留学生がいるとは思わなかった」と言うほど国際色豊かで、日本人学生もよい刺激を受けているように思います。今回の特集「環境学の国際展開」では、教育と研究それぞれの側面から国際化の様相に触れてみました。新型コロナウイルスの影響で他国との行き来もままならなくなっている渦中ですが、環境学の対象が極めてグローバルであり、今後のウィズコロナ、アフターコロナ社会の持続可能性を考える上でも、国際的な繋がりの中での教育・研究が不可欠であることを改めて実感しました。ご協力いただきました先生方、どうもありがとうございました。(井料 美帆)

環

KWAN

名古屋大学大学院
環境学研究科

vol.39 2020年9月

【環・39号 広報委員会】

井料 美帆(環39号編集委員長)

室井 研二(広報委員長)

浅原 良浩

坂井 亜規子

宮脇 勝

香坂 玲

山岡 耕春

編集／編集企画室 群

デザイン／オフィスYR